

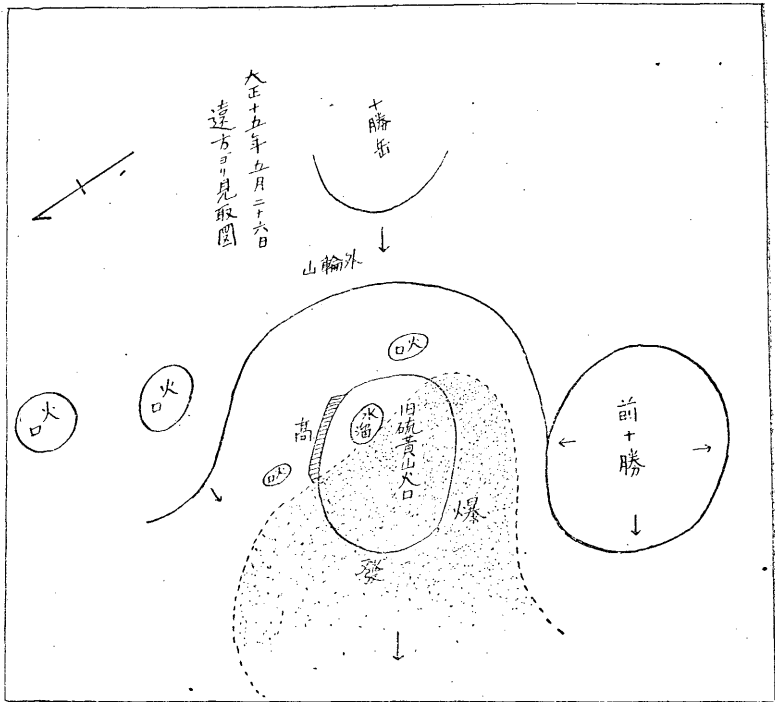
十勝岳硫黃山爆發踏査報告

旭川測候所

五月二十四日夜（五月二十六日踏査）十勝岳爆發の悲報に接し翌二十五日旭川出發美瑛上富良野間汽車不通のため長谷川技手は美瑛より被害狀況等を調査しつつ、登山し星川技師は龍川を經由して上富良野に至り二十六日登山を決行し附近の狀況を視察し殊に噴烟、鳴動、地震等の有無に付て注意せり。爆發せる硫黃山は上富良野を距る五里弱、美瑛より六七里の山中にて一の電信電話の通ずるなく行通甚だ不便なり。積雪は針葉樹林帶（上富良野より二里半強）に入るに従ひ斑に残留し三里にして一尺五寸、三里半にして二尺より三尺あり、平山事務所附近の窪地には尙一丈餘り積雪ありたり。之れより舊噴火口に至る間は遽かに急傾斜をなし登山甚だ困難とす。

一、位置 十勝山は石狩十勝の國境に聳立せる活火山にして海拔二千七十七米あり。之れより北西中腹に當りて不斷噴烟の昇騰するを見る。これ即ち硫黃山（二重火山海拔一六三七米）にして噴火口よりは常

第一圖



に多量の硫黄瓦斯を吐出せり。

一、噴火の歴史 往時の噴火は更に文献

の見る可きものなく殆んど知る能はず、

最近に至りては大正十二年五月第一鑛の

硫黄沼が熱湯に變り高さ十七八尺吹き上

げ半月位の後、黄硫に變り其の後十一月

まで繰返せり。大正十四年九月第二鑛第

三鑛附近に於て硫黄瓦斯の噴出多量にな

れりと云ふ。更に同年十一月南東側に小

噴火あり。十五年二月頃噴烟一帶に多量

となり經二寸位の礫を飛ばし爲めに硫黄

約五十噸焼失す。同年五月七日先きの南

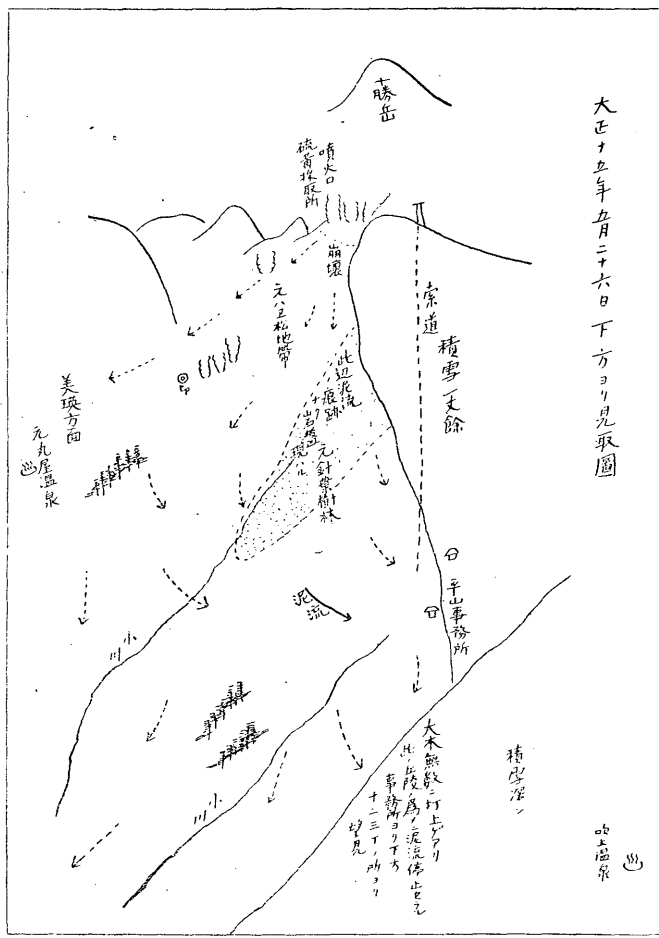
東側の小噴火口と並列して稍強き噴火

ありたり。五月十七日本所技手登山せし

當時は鳴動全くなかりしが尙青色の火焰

盛なりしを認む、今回の鳴動は午前十一時頃より始まり吹上温泉まで響き噴烟の量増加し最も烈し十三

大正十五年五月二十六日 下方ヨリ見取圖



第二圖

一時頃（美瑛村役場報告午前十一時三十分、微動計記象紙には十二時十一分十六秒之れは第一回目の次

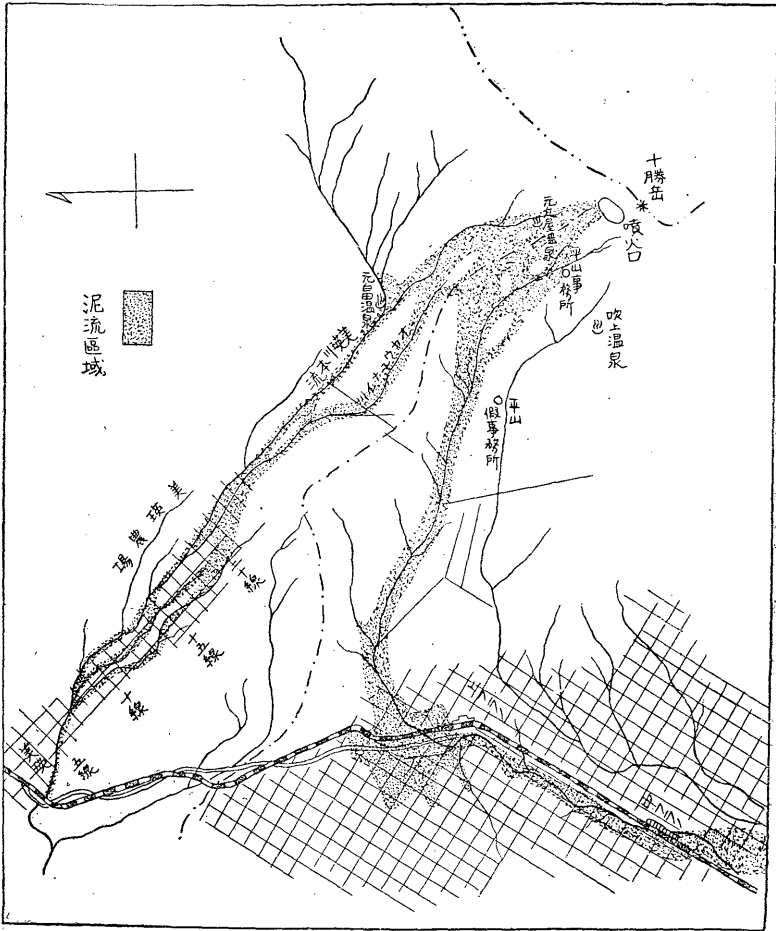
四日頃の如きは山麓にて地震を感じ四五里の西方にある上富良野市街にてすら汽車の接近せるが如く硝子戸の動搖せるを覺えたり。其後鳴動殆んど止したりしが如きも山麓にては鳴動地震等感ぜりと云ふも確かならず。

一、爆發の時刻 今回

の爆發は午前午後の二回とす第一回は午前十

第三圖

大正十五年五月廿六日十勝岳硫黃山爆發泥流區域



に再噴火ありしもの
 ならんか)にして舊
 火口の下方らしく勢
 力弱し、事務所にて
 實見者の談に依れば
 噴火の音響聞へしに
 依り、調査の爲め採
 取所へ行き、取り調
 べしに異状なかりし
 と云ふ、又噴火の箇
 所は噴火口より遙か
 に下方(◎印の所)に
 て之れは第二回目の
 爆發泥流の爲め大部
 分埋没せられたるも

のなりと云ふ、目下噴烟微弱なり、(参考の爲め附記す)第二回目は當所の据付の微動計記象紙の記録によれば十六時十七分五十五秒(十六時十分、十六時十五分とも云ひ、美瑛村役場報告には十五時四十分頃とあり而して平山鑛業事務所と假事務所間一里半に電話の架設あり第一回噴火の音響假事務所に聞こへしを以て調査の爲め本事務所へ行き尙噴火の懸念ありしを以て協議の爲め通話中突然不通となれり此時事務所は泥流の爲め破壊せられたるなり、時刻は午後四時十分)にして噴火の箇所は第一回目より舊火口に近き西側全部爆發せり又五月七日及昨年十一月小噴火の箇所には異狀なし。

一、爆發の動機 此の原因に就ては勿論種々ある可しと雖ども融雪に至れば例年舊噴火口内に水溜を生ず殊に本年は降雪多量のため一層量を増加し又噴火當日山上強雨あり、自然火口内にも滲透浸入したる水量も多かる可く水蒸氣多量となり一方本道附近は弱き低氣壓部圏内なりしを以て偶々噴火せんとする機會を與へたるもの如し。

一、爆發の強弱 上富良野市街にては爆音を聞きたるもの尠なく爆音を聞きたるものは激流が樹木家屋等を流出せる音響を云ひしものならんか、山麓なる平山事務所にて生存者の話に依れば爆音と同時に泥流急劇に襲來せりと云ふ。而して今回の爆發の勢力は火山學上より見れば餘り強烈ならざれども火口壁が脆弱なる土質より構成せられ一方融雪期に際し土壤極めて濕潤を呈せし結果口壁崩潰せしもの如し。

一、降灰 上中富良野村にては降灰の現象なし、當時風向が南風のため帶狀をなして山岳地方に飛散し

硫黄山より約十里北方にある層雲溪温泉にては雨中降灰甚しと云ふ。

一、噴烟の色 火口よりの噴烟は硫黄瓦斯なるを以て青色を帯び多量に噴出あるを以て接近甚だ危険とす。故に風行の如何に注意し噴火口内を敢下望見するを要す、

一、泥流の方向及び速度 泥流の方向は北方に向ひしものは郡境を越へて美瑛川上流の溪谷に流下し北西方の斜面を流下せしものは富良野川上流の溪谷に入れり其流量の割合は大差なきものの如く又泥流の速度は確かならざれども噴火口より上富良野迄五里(?)、假定し噴火時刻を午後四時十八分上富良野に襲來せるを午後四時三十八分(確定ならず)とし此の間を二十分間とせば一分間〇・二五里流走せし割合となる。

一、溶岩 崩潰せる傾斜地へ泥砂を以て蔽はれ溶岩流を認めず、噴火口附近には火山礫の散在せるもの多數あり。大なるは牛糞狀をなして徑三尺位のものあり。

一、傾斜面に於ける被害面積 傾斜面一帯は堰松地帯、針葉樹「がんび」の樹林なりしが泥流の爲め悉く流去して今や全く其面影なく被害面積は目下の所到底詳かならざれども目測三百町歩以上ならんか、而して右方中腹の小澤には泥土全くなく岩磐の露出せる箇所あり。

一、噴火口壁崩壞の幅員 之れも實測に待たざる可からざるも目測略三丁位と推定せり。(附近には無數の小噴汽口あり)

一、**慘害を出來せる重なる原因** 今回慘憺たる被害を起さしめたる主因は勿論第一爆發とす、第二は當日二三日前に於ける火口壁附近は積雪三尺堰松地帯針葉樹林帯には一丈低地には一丈五尺位の積雪あり。此傾斜地に於ける大面積の積雪は水蒸氣熱泥崩潰せる土砂、岩石、千五百噸の燃燒せる硫黃等の爲めに急劇に融解せるにあり。

一、**天氣** 昨夜來降雨ありしが十時頃より細雨となり、山上山麓は一面に霧を以て蔽はれ爆發當時は雨霧薄らぎ後再び細雨に霧を交へたり其の他異狀現象なしと云ふ。

一、**泥沙** 二十六日午後登山に際し山麓なる平山事務所にては泥沙未だ乾燥せず中腹に至れば表面稍々乾燥せしも尙草鞋を通じて溫暖を覺へたり。又上富良野市街附近に於て乾燥せる泥沙を火中に投ずるに臭氣あり。良く燃燒するを見る。

一、**鳴動噴烟の異狀** 二十六日山麓へ着後之等の現象に付き特に注意せしが噴烟の勢力は爆發前より衰頽せし如きも、其の量は増加せしが如し。二十七日午後一時黒烟濛々として立ち昇り一時は甚だしく杞憂せしが約二十分間にして止む。

美瑛方面

一、**泥流の狀況** 同地方の泥流は二回あり、第一回は（午後零時十一分十六秒此時刻は他の原因に依るものならんか役場報告は午前十一時三十分頃とあり）音響を聞きたる後灰黒色の水押寄せ來り美瑛川稍

や増水し低所の田畑には多少の濁水(灰白色)を齎し、少時にして止みたり、第二回目は(午後四時十七分五十五秒)役場報告は午後三時四十分頃とあり。大音響と共に忽ち濁水を齎し火口を去る約一里半の地點にては音響を聞きてより僅か二十秒位にして一丈に餘る高さの濁水を見たりと云ふ。又濁流は徑二尺乃至三尺の大石と多數の流木とを持ち來し、同時に全山振動し直立殆んど困難なりしと其の後三十分も経過せりと思はるゝ頃より忽ち減水し始め、さしもの大泥流も約一時間後には全く絶え遙か彼方に去りたり。

美瑛より約二里の上流美澤附近にては第二回の音響を聞きたる後約十分にして戸、障子激しく振動し何事ならんかと屋外に馳せ出づれば約三十分間にして一里先は濃霧現はれ急速度にて接近し僅か數分間にして地上丈餘の泥流と多數の巨木とを伴ひ目前に迫り流木は所謂水平軸の渦動狀に似て流るゝを見たりと、其後四十分後には泥流全く其影を失ひ濃霧(但地上數尺に過ぎず)漸く霽れたるも夜に入り再び附近を閉ぢ三尺以上辨明せざりしと云ふ。

一、泥水の流路 火口附近よりの泥流は樹林帶の少しく手前より二途に別れ一は上富良野に向ひ、他は美瑛に向ふ、美瑛に向ひしものは畠山温泉附近より更に二途に別れ一は美瑛川本流に沿ひ他は道路面に沿ひ數丁にして小川に沿ふ、而して美瑛農場入口にて再び兩者相合して美澤を襲ひ更に美澤に十線附近より二途に別れしも十二線十三線間の低所にて又々合一して畑地を浸し三度別れて美瑛川本流と他は小

川に沿ふ。之れより下流は美瑛川本流に沿ふもの主をなし低所にては所々畑地或ひは道路面まで溢れたり。

被害の状況

一、平山事務所は噴火口より一里弱の麓にあり、事務所、倉庫、飯場其他十数棟ありしが泥流のため殆んど流出し僅かに半壊の一二棟残留あるのみ之れより五丁、十丁、下方の小丘には家屋の柱土臺等打上げられ根松徑五寸、一尺二尺以上のもの多數に散在せり。此邊一帯は噴火口傾面の反対側にて流下せる反動に依て此小丘に打上げしものなるが其高さは凡そ十五間以上の高所とす。泥流が若し此小丘を越へ吹上温泉の溪澤に出づれば被害は一層慘狀を呈せしならん、實見者の談に依れば此日雨天の爲め休業し五十名の内半数は中川温泉に行き半数は宿舎に居りしが一大音響の聲へしと共に暗黒なる泥流、山上より怒濤の如く狂奔し來り瞬間に家屋を破壊流失せしものなりと云ふ。

一、假事務所より密生せる熊笹の峯を越え富良野川（市街より三里の上流）の上流に出づれば河流急なれども川幅僅かに四五尺に過ぎず、此邊一帯表土洗はれ積と變じ大なる石塊は徑四尺以上のもの多數あり、此積の幅約五十間、二三間高まりたる所にて約八十間あらん、傾斜地には壁土の如く一面に泥土の痕跡あり、其高さ河底より六七間あり、（或ひは河底が流失低下せざる前の痕跡とも見ゆ）實見者の談に依れば波の高さ、凡そ二丈餘あり、流木は縦に捲き込まれ來れりと云ふ。

一、新井牧場に入れば谷間次第に展開せるも道路は全然跡型なく流木は附近に積推し沃土は全部流失して石塊到る所に散在せり、而して住家は小高き平地にありしが悉く流失して死傷者は之れより下流に多し。

一、三重團體 同團體は上富良野市街附近にありて同地方の主腦地と稱せらる、鐵道線路は同團體の東部を縦貫す。當時泥流が流木と共に襲來して線路上の土砂枕木等を流出し四日間汽車不通となりしが激流は幸ひ此線路の土堤の爲めに勢力を殺がれ線路西側の家屋は流失を免れたるものあり。浸水の高さは種々あれども床上四尺以上の所あり。水田は泥砂のために二尺以上四尺埋没せらる而して此泥流は夫れより中富良野方面へ流出して田畑を埋没し被害面積甚大なり。

一、美瑛方面 當地方にては美瑛農場の上半分被害最も多く美瑛市街地附近(丸山附近)にも田畑に浸水し荒廢に至れる所あるも其區域大ならず、丸屋温泉畠山温泉共に流出して跡型なし。當時に於ける被害調は左の如し。

災害表

(一)上富良野村

(1) 罹災戸

種別	耕地家屋人	耕地家屋	耕地人	耕地家屋人	家屋	人	硫黄山	計
員數	耕地家屋人死者不明者	八五	二	五六	二	一一	一	五二
	三一							二三九

(2) 死亡者行衛不明者、男六十人、女七十七人 計百三十七人

(3) 民有地被害

計	其他	畑	田	宅地	埋没流失		被害金額	備考
					流失	埋没		
七、四七六・五	一、〇二一・五	二、二四八・五	五、〇五九・四	六五・一 ^反		一、〇一一、八八〇	一三、〇二〇 ^円	表土流失又は埋没したるため耕作不能となりたるものなり
						八九、九四〇		
						四一、四〇〇		
						一、一五六、二四〇		

(4) 耕作被害

計	畑	田
六、九四八・五	二、二四八・五	四、七〇〇・〇 ^反
一二一、二八六	二〇、三三六	一〇一、〇五〇 ^円

(5) 建物被害

損害高	建物棟数	住宅				納屋				其他			
		流失	半流出	半潰	潰	流失	半流出	半潰	潰	流失	半流出	半潰	潰
一〇一、〇〇五 ^円	五四	一八	五七	五八	一七	四七	五四	一二	三四				
七二、六一〇 ^円													
一八、二〇五 ^円													

(6) 公共建物被害

- 日新尋常小學校流失 損害見積高 三 千 圓
- 上富良野尋常小學校大破 同 四千八百圓
- 農産物検査所第二區派出所流失 同 千八百圓
- 草分青年會俱樂部半潰 同 千二百圓
- 日の出青年會俱樂部全潰 同 四 百 圓
- 專誠寺泥土浸入半潰 同 二千七百圓
- 大雄寺浸水 同 百十二圓

計 一萬四千十二圓

(7) 其他の建物被害

- 伊藤木工場 半潰八百圓 浸水百四十圓 東洋製線
- 株式會社上富良野工場材料倉庫 浸水泥土 千五百圓

計 金二千四百四十圓

(8) 家畜被害

頭	數	價	格
牛	二〇	五、〇〇〇	圓
馬	二〇〇	六〇、〇〇〇	
豚	一〇	七〇〇	
鶏	一、〇〇〇	一、五〇〇	
計		六七、二〇〇	

(9) 家屋流失半潰等に因る家財道具、農具等損害見積額

金十二萬一千圓

(10) 河川損害(埋没)

フライ川損失

十二萬圓

エホロカンベツ川損失

四萬三千圓

計

十六萬三千圓

(11) 道路損害

浦河旭川線一里十八丁

八 千 圓

町村道十一里十二丁

五萬三千二百圓

計

六萬一千二百圓

(12) 橋梁損害

準地方費道三箇所延長約二十間

三 千 圓

町村道三十箇所延長九十間

一萬八百圓

計

一萬三千八百圓

(13) 灌漑溝(埋没)

草分土功組合水路 幹線二里、支線三里 十二萬圓

(14) 穀物

米二千石 六萬八千圓 } 十萬八千圓
 雜二千石 四萬圓

總計 二百十三萬九千九百九十八圓五十錢

外に硫黃山平山鑛業所被害見積五十萬圓

官林被害原木三十萬石

(二)美 瑛 村

(1) 罹災戸數(家屋被害は流失四戸半潰一戸なり)

種 別	家 屋	家 屋	耕 地	計
員 數	三	二	八二	八六

(2) 死亡者行違不明者 男五人 女二人 計七人(死者四人、行違不明者三人)

(3) 民有地被害

宅地流失埋没反別二反	金額	四	十	圓
田 同	四〇〇反	同	八	萬
畑 同	二三一四反	同	十二萬五千七百圓	
其他同	四五〇反	同	九	千
		計		三十百六十六反
				二十萬四千七百四十圓

(4) 耕地被害

田	埋没流失	四〇〇反	被害高	八、六二二圓五
畑	同	二、三一四反	同	一五、一九二圓〇
計		二、七二四反		二二、八一三圓五

耕作肥料を施したるもの四十丁歩
耕作し又は作付したるもの百六十八丁八反歩あり

(5) 建物被害住家五戸七棟七千六百六十五圓

物置一棟五十圓 計七千二百十五圓

(6) 家畜被害牝馬一溺死三百圓

(7) 家財被害 三千二百八十五圓

(8) 道路橋梁 一萬五千三百六十九圓

(9) 河川損害 一萬一千二百圓

總計金二十六萬五千九百二十二圓五十錢

(1) 民有地被害

田 埋没反別 一、三四五反 十六萬九千四百七十圓

畑 同 二八・五反 千百八十五圓

合計 一、三七三反五 十七萬六百五十五圓

(2) 道路橋梁 一萬一千四百圓

(三) 中富良野村(罹災戸數七二戸)

總計 十八萬二千五十五圓

三箇村損害合計二百五十八萬七千九百七十六圓

外に鐵道、國有林、御料林、電信、電話、及平山鑛業

事務所の損害巨大なるものあり。